

井原 駿

大阪大学大学院／日本学術振興会特別研究員

iharashun0@gmail.com

## 1 背景・目的

本研究の目的は、終助詞 (sentence-final particles) または談話助詞 (discourse particles) の生起に働く語用論的メカニズムを明らかにすることである。Heim (1991) によって定／不定冠詞の生起に「前提の最大化 (*Maximize Presupposition*)」が関わることを提案されて以来、定／不定冠詞に留まらず様々な前提トリガー (presupposition triggers) の振る舞いを *Maximize Presupposition* によって捉える試みが為されており (e.g. Percus 2006, Sauerland 2008), 終助詞のように談話参加者の発話態度や心的状況を前提とする助詞もその例外ではない (e.g. Grosz 2014).

本研究では、*Maximize Presupposition* が日本語における終助詞「よ」の生起に関して経験的に誤った予測をすることを指摘する。その上で、「よ」の生起には *Maximize Presupposition* ではなく「義務的含意 (*Obligatory Implicatures*; Bade 2014, 2016)」が関わることを主張する。具体的には、終助詞「よ」を「命題を焦点とする焦点助詞 (propositional focus particles)」であると定義し、発話文の命題内容が文脈における QUD (Question under Discussion; Roberts 1996) への回答として不完全である場合に、その不完全性を回避するために義務的に挿入されることを提案する。

## 2 Maximize Presupposition!

Heim (1991) は、Grice (1975) の「量の公理 (*Maxim of Quantity*)」では (1) のような定／不定冠詞の振る舞いを捉えられない (すなわち, (1a) と (1b) は聞き手に伝達する情報量の点では等しい) ことを問題とした上で *Maximize Presupposition* (= (2)) を提案している。

- (1) a. #**A** sun is shining. [assert: *sun* is shining.]  
 b. **The** sun is shining. [assert: *sun* is shining.]

- (2) *Maximize Presupposition* (Heim 1991):  
 Make your contribution presuppose as much as possible!

近年、*Maximize Presupposition* はあらゆる前提トリガー (presupposition trigger, e.g. *too, again, know, believe*) の生起を捉えることを目的に精緻化・拡張されている (Percus 2006, Sauerland 2008, Chemla 2008, Schlenker 2012) :

- (3) *Maximize Presupposition* (reformulated version of (2), Percus 2006):  
 a. Alternatives are only defined for lexical items. For any lexical item, the alternatives consist of all “presuppositionally stronger” items of the same syntactic category.  
 b. Do not use  $\phi$  if a member of its Alternative Family is felicitous and contextually equivalent to  $\psi$  ( $\phi$  is contextually equivalent to  $\psi$  iff for all  $w$  in the common ground,  $\phi(w) = \psi(w)$ ).

この理論におけるポイントは、(i) 前提トリガーを語彙的競合 (lexical competition) の関係 (: (4)) にあるとみなし、(ii) ある環境下において、「強い」前提を必要とするトリガーの前提が満たされた場合は必ずそのトリガーが生起しなければならない、「強い」前提が満たされていない場合には「弱い」トリガーが生起しなければならないことを要求する点である (e.g. (5)). このように、*Maximize Presupposition* は相補分布的關係を持つ前提トリガーの生起を正しく予測する。

- (4) The scales of ordered lexical items  
 {the, a}, {know, believe}, {too,  $\emptyset$ }, {again,  $\emptyset$ } ({{[STRONG item]}, [WEAK item]})

- (5) Hanako drank beer. → *too* の presupposition が満たされる  
 a. #Taro did  $\emptyset$ . → MP によって ‘ $\emptyset$ ’ の生起が阻害される  
 b. Taro did, **too**. → MP によって *too* が要求される

### 3 「よ」の意味論・語用論

終助詞「よ」に関する先行研究の間には、「(概略, ) 「よ」は、話し手 (speaker) が (i) 命題  $p$  に関して聞き手 (addressee) は認識しておらず、かつ (ii)  $p$  は聞き手が気付くべき／認識するべきことである (あるいは、それと関連している) と信じていることを前提 (presupposition)<sup>\*1</sup> とする」という共通見解がある (井上 1997, Takubo & Kinsui 1997, 宮崎 (他) 2002, McCready 2009, Davis 2009, 2011, Oshima 2014, a.o.). 以下に示すように、この前提が満たされている場合にのみ「よ」は定義される。

- (6) 文脈 [太郎と花子が駅のホームで電車を待っている。彼らが乗る予定の電車が到着したが、花子はメールの返信に夢中でそれに気付いていない。太郎は彼女にそのことに気づいてもらおうと次のように言う:]  
 a. <sup>2-??</sup>電車が来た。  
 b. 電車が来たよ。
- (7) 文脈 [太郎と花子が駅のホームで電車を待っている。電車がホームに到着したのを見て花子が「電車が来たね!」と言ったのに対し、太郎は次のように言う:]  
 a. (うん, ) 電車が来た。  
 b. <sup>??</sup> (うん, ) 電車が来たよ。

Davis や McCready は「よ」の意味を *Question under Discussion* (QUD, Roberts 1996) と呼ばれる概念を用いて分析している。QUD とは、直感的には「ある文脈において問題となっている問い」の集合 (set) であり、談話において明示的 (explicit), あるいは暗示的 (implicit) に存在していると仮定される。さらに、本研究では AnderBois (2016) による Immediate QUD (IMM-QUD) を用いて「よ」の意味を定義する。これは直感的には「QUD のうち (そのコンテキストにおいて) 最も重要度の高いもの」であり、(7) のように定義される。これを用いて、本研究では終助詞「よ」の意味を (8) のように定義しておく。

- (7) Immediate QUD (IMM-QUD, AnderBois 2016)  
 a. QUD is a set(stack) of contextual abstract questions ordered by precedence (Roberts 1996)  
 b. IMM-QUD is the highest ranked question in the QUD. Technically, it contains the unique  $q'$  such that for all  $q \in \text{QUD}$  where  $q \neq q'$  and  $q < q'$ .

- (8)  $\llbracket yo \rrbracket = \lambda\phi. \exists p. [p \in Q_{[0]}^C \wedge \phi(w)$  is concerned with  $p(w)]$   
 where  $Q_{[0]}^C$  is a set of possible answers to the IMM-QUD in  $C(\text{ontext})$ .

(i.e.: 「よ」の付加する命題  $\phi$  は命題  $p$  に関連する。命題  $p$  はその文脈で最も重要な QUD (= 「聞き手は何をするべきか／認識するべきか?」) に対する回答である。)

すなわち、「よ」の生起は「その文脈において聞き手が (直ちに) 認識すべきことが存在する」ことを示唆する。本研究では、以下、これを「よ」の持つ基本的な意味とみなした上で議論を進める。<sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup> ここでの「前提 (presupposition)」は Stalnaker (1974) 流の前提 (*Stalnakerian presupposition*) ではなく、いわゆる *expressive presupposition* (Sauerland 2007, Schlenker 2007) であり、Stalnaker の前提とは性質が異なることに留意されたい (詳しくは Sauerland (2007), Schlenker (2007)). そのため、終助詞等の談話助詞を *Maximize Presupposition* によって捉えようとする自体、問題となる可能性がある。本研究では、この問題も考慮に入れた上で代替案を提示している。

<sup>\*2</sup> 終助詞「よ」は、文末のイントネーションによって異なる意味・機能を持ち得ることが広く知られている (郡 1997, Davis 2011, Oshima 2014 など)。本研究では、その意味の差異は各イントネーションが独自に持つ意味によるものであると考え、「終助詞+イントネーション」の意味は構成的 (compositional) に導出されるという立場をとる (cf. Davis 2011)。本研究では議論の簡易化のため、(8) が「よ」の持つ核の意味であるとみなし、これを「よ」の意味として分析を進める。

## 4 Maximize Presupposition と「よ」

*Maximize Presupposition* は、終助詞のような談話助詞 (discourse particle) の生起にも適用され得る。例えば、Grosz (2014) ではドイツ語の談話助詞 *doch* と *ja* の生起関係を *Maximize Presupposition* によって捉える分析を試みている。<sup>\*3</sup> 本節では、日本語における終助詞「よ」の生起に関して *Maximize Presupposition* が経験的に誤った予測をすることを指摘する。まず、*Maximize Presupposition* を「よ」に適用した場合、以下 (9a) のような仮定と (9b,c) のような予測が得られる。

- (9) a. 語彙スケールとして、(i) 終助詞「よ」と、(ii) それが生起しない空の要素「 $\emptyset$ 」を仮定する。すなわち、{yo,  $\emptyset$ }。<sup>\*4</sup>  
b. 「よ」は、話し手がその発話によって「聞き手が何をすべきか」を明示的に示唆することを意図している文脈においてその生起が義務的に要求され、この時「 $\emptyset$ 」は生起し得ない。  
c. 「 $\emptyset$ 」は、発話文脈が (9b) を満たさない場合に要求され、この時「よ」は生起し得ない。

第一の問題点として、*Maximize Presupposition* は以下 (10c) のような文における呼格 (vocatives) 表現の生起を正しく予測できない。

- (10) 文脈 [太郎と花子が駅のホームで電車を待っている。彼らが乗る予定の電車が到着したが、花子はメールの返信に夢中でそれに気付いていない。太郎は彼女にそのことに気づいてもらおうと次のように言う:]  
a. <sup>?-??</sup>電車が来た。  
b. 電車が来たよ。  
c. {ちょっと／ねえ／花子}, 電車が来た。

呼格に関する近年の研究では、呼格の表出する意味は「慣習的含意 (conventional implicature (CI, Potts 2005 a.o.))」(あるいは use-conditional meaning (Gutzmann 2012)) であるとみなすのが妥当であり、「命題内容は話し手から聞き手へのメッセージである」という意味を表出するとされている (e.g. Eckardt 2014)。そのため、呼格は *Maximize Presupposition* には関与しないと仮定する。これが正しいとすると、(10c) のように呼格が生起した際に終助詞の生起が義務的ではなくなる (少なくとも (10a) と比較して容認度が顕著に上がる) ことが問題となる。すなわち、*Maximize Presupposition* は (10) のように「よ」の前提が満たされた文脈では必ず「よ」が生起しなければならないことを予測するため、共に「よ」の生起していない (10a) と (10c) は等しく容認度が低い文でなければならないはずであるが、実際には呼格の生起している (10c) の容認性は (10a) に比べ高くなり、*Maximize Presupposition* の予測と反する。

二点目の問題は、「よ」の前提が満たされている文脈において、「よ」の生起しない文は少なくとも「やや不自然」あるいは「よ」の生起する文の方が (相対的には) 自然」ではあるものの、文自体について「完全に悪い」とは言い切れないと評価する母語話者が少なからず存在する点である (例えば、(10) の文脈において (10a) が「完全に不自然」とは言い切れないとする話者が存在する)<sup>\*5</sup>。第2節で述べた通り、*Maximize Presupposition* は競合する語彙のうち意味的に「強い」方の語彙の前提が満たされた場合は「弱い」方の語彙が生起してはいけないことを予測するため、このような選好性 (「よ」の生起が少なくともより「好まれる」という性質) は当該の理論にとって問題となる。

<sup>\*3</sup> Grosz (2014) は、*ja* と *doch* について両者ともに「命題が確立 (established) している (すなわち、命題が偽であることを棄却できる)」ことを前提とし、*doch* はさらに「訂正 (correction)」の前提を要するとみなした上で、{*doch*, *ja*} の語彙スケールを仮定している。具体的には、命題が「確立」している文脈において、「訂正」の文脈が満たされた場合には *doch* のみが生起可能となり *ja* は生起できない一方、「訂正」の文脈が満たされていない場合には *ja* のみが生起可能となり *doch* は生起できないことを予測する。詳しい分析に関しては Grosz を参照されたい。

<sup>\*4</sup> 「よ」と対立する表現として終助詞「ね」が想定される可能性もあるが、「よ」と「ね」は共起して「よね」を形成し得ることや、両者を単純な意味の強弱で関係付けることが難しいことから、本研究ではこの方略を取らない。

<sup>\*5</sup> この点に関しては、Ihara (in preparation) における日本語母語話者を対象とする実験において確かめられている。

## 5 代替案：Obligatory Implicatures

### 5.1 Obligatory Additives

Krifka (1999) や Sæbø (2004) は、累加詞 (additives) “too” の生起には対照の含意 (contrastive implicature) が関わっており、発話文の含意が文脈に矛盾する時に *too* が挿入されるという分析している。すなわち、文脈において発話文のフォーカスの代替集合 (focus alternatives) のメンバーが (先行する発話などによって) 既に明示的に存在するときに *too* が挿入される。 *too* の前提を (11) に示す。

(11) Presupposition of *too*:

$$\exists p. [p \in Alt \wedge p(w) \wedge p \neq \llbracket \phi \rrbracket^0]$$

(i.e.: 真であるような発話命題  $\phi$  の他に代替集合 *Alt* のメンバーである命題  $p$  が存在する.)

Bade (2014,2016) は Krifka らのアイデアを拡張し、*too* の義務的な生起は、発話文が QUD に対する答えとなる場合に義務的に生起する排他オペレーター (*exhaustivity operator*; Fox 2007, Chierchia et al 2012, Chierchia 2013) によるものであると主張している。排他オペレーターは、基本的には *only* に相当する定義が為されており、例えば “Only [Taro]<sub>F</sub> came.” の意味は、代替集合  $Alt = \{came(Taro), came(Jiro), came(Hanako), \dots\}$  を想定し、発話命題の ‘*came(Taro)*’ 以外を排除することによって得られる。このオペレーターが QUD の答えとなる発話に関わる場合、(12) のように定義される。

(12) Exhaustivity operator working on the question set:

$$\llbracket \mathbf{exh} \rrbracket (Q)(\phi)(w) \Leftrightarrow \phi(w) \wedge \forall q [q \in Q(w) \wedge \phi \neq q \rightarrow \neg q(w)]$$

(i.e.: **exh** は QUD に対する可能な答えの集合  $Q$  (question set; Hamblin 1973, Karttunen 1977), に作用し、命題  $\phi$  を QUD の答えとして最も (質・量が) 適したものとして同定する.)

このオペレーターにより、(13) のような対照の含意が得られる。

(13) A contrastive implicature generated by a sentence with focus (and without *too*):

$$\neg \exists p. [p \in Alt \wedge p(w) \wedge p \neq \llbracket \phi \rrbracket^0]$$

(i.e.: 真であるような発話命題  $\phi$  の他に真であるような代替命題は存在しない.)

Bade は、(13) のような含意が意味的に矛盾を引き起こす場合に、*too* が (11) の意味を伴って義務的に挿入されると分析する。例えば、以下 (14) において *too* は (14a) のような矛盾 (すなわち “Peter and *only* Mary came to the party”) を回避するために挿入される。

(14) (QUD: Who was at the party?)

[Peter]<sub>F</sub> was at the party.

[Implicature: No one else at the party]

a. #[Mary]<sub>F</sub> was at the party.

[Implicature: No one else at the party (= contradiction)]

b. [Mary]<sub>F</sub> was at the party, **too**.

[Implicature: Mary was at the party (besides Peter)]

### 5.2 Obligatory Sentence-final Particles

本研究では、Bade (2014,2016) のアイデアを終助詞の分析に拡張することで、第4節にて指摘した問題に対処した上で「よ」の生起を正しく予測可能となることを提案する。以下にその概要を示す：

- 「よ」を「命題レベルの焦点助詞 (propositional focus particles) 」であるとみなす
- 「よ」は、発話命題の内容が文脈における QUD への答えとして不完全である場合に文末に挿入される
- 「よ」の生起は (*Maximize Presupposition* ではなく) *Obligatory Implicatures* によって引き起こされる

例えば、以下 (15) (= (10)) において (15b) の「よ」は命題「電車が来た」を焦点とする。

(15) 文脈 [(10)]

(QUD: 聞き手 (: 花子) は何に気付くべきか/何をすべきか)

- a. <sup>?-??</sup>[電車が来た]<sub>F</sub>.
- b. [電車が来た]<sub>F</sub> よ.
- c. {ちょっと/ねえ/花子}, [電車が来た]<sub>F</sub> (よ).

Bade と同様、発話文が QUD への答えとなると排他オペレーターによって対照の含意 (= (13)) が得られると考える。(15) において、QUD = 「聞き手が何に気付くべきか」に対して、「よ」が付加されていない文 (15a) は単に排他的意味 (すなわち「 $[\phi: \text{電車が来た}]$  の他に QUD の答えとなるような命題は存在しない」) を表出するに過ぎないため、QUD の答えとしては不完全である。そこで、(15b) のように「よ」が挿入されることで、排他的意味に加えて「 $\phi$  は (15) の文脈において聞き手が気付くべきことである (あるいは「 $\phi$  は聞き手がすべきことと関連している」)」という意味が表出され、QUD に対する完全な回答となる。「よ」の付加した発話文の意味は以下 (16) のようになる ((16a) における代替集合は IMM-QUD に対する question set ' $Q_{[0]}^C$ ' となる点に注意されたい (cf. (7),(8),(13))).

(16) The meaning generated by sentences with *yo* (= '*yo*( $\phi$ )'):

- a. The meaning generated by  $\phi$ :  
 $\neg \exists p. [ p \in Q_{[0]}^C \wedge p(w) \wedge p \neq \llbracket \phi \rrbracket^0 ]$
- b. The meaning generated by *yo* (in *yo*( $\phi$ )):  
 $\exists q. [ q \in Q_{[0]}^C \wedge \phi(w) \text{ is concerned with } q(w) ]$

本分析においては第4節で指摘したような問題は発生せず、経験的妥当性を確保できる。まず一点目として、(15c) のように呼格が現れる文が「よ」を伴わなくても (少なくとも (15a) と比べて) 自然な文になることを正しく予測できる。既に述べた通り、呼格は CI として「命題内容は話し手から聞き手に対するメッセージである」という「よ」と類似した意味を持つため (Eckardt 2014)、呼格が現れる文はそれ自体で QUD に対する完全な回答となり得る (すなわち、命題内容が聞き手に対する指示 (indication) であることを意味として表出できる)。したがって、「よ」の挿入が義務的にはならず、(15b) のように「よ」の生じた文と同様の容認性となることを予測する。

二点目として、(15a) のように「よ」や呼格が生起しない裸の文の容認性に関して、相対的に不自然ではあるものの「完全に不自然」とは言い切れないと判断される可能性についても、本分析では問題とならない。(16) に示したように、裸の文は (16a) のような排他的意味を表出する点で QUD への答えとして (不十分ではあるものの) 部分的に回答しているとみなすことができるからである \*6。また、*Obligatory Implicatures* では *Maximize Presupposition* のように語彙的スケールを仮定しないため、語彙の相補分布的対立を要求しない。したがって、本分析は「よ」の前提が満たされている文脈において「よ」の生起が (生起しない場合と比較して) 「少なくともより好まれる」という選好性を捉えることができる。

さらに、理論的経済性の観点においても、「よ」と ' $\emptyset$ ' に対して (*doch* vs. *ja* のような) 語彙的スケールを独立に仮定する必要がないため、*Maximize Presupposition* に比べ経済的であると言える (cf. Bade 2016)。

## 6 結論

本研究では、終助詞の生起に関わる語用論的メカニズムは *Maximize Presupposition* ではなく *Obligatory Implicatures* であることを提案した。本分析は、「よ」に留まらず他の日本語終助詞 (e.g. 「ね」

\*6 この「部分的」な回答が QUD の回答としての解釈に結び付き得ることに独立に説明が必要である。可能性として、関連性理論 (Sperber & Wilson 1995) による推論 (inference) との関連が考えられるが、具体的な分析については今後の課題としたい。

「さ」「わ」)の分析にも適用可能であり、さらには、*Maximize Presupposition* がどのタイプの言語表現に適用できるのか（あるいはできないのか）という理論の射程の解明に繋がる点で当該の研究領域に貢献する (cf. (17)).

- (17) a. Empirical scope of *Maximize Presupposition* (Bade 2016):  
singular definite, plural definite  
b. Empirical scope of *Obligatory Implicature* (Bade2014,2016, This work):  
additives, factive verbs, discourse(/sentence-final) particles

## Acknowledgement

本研究は、JSPS 科研費 17J03552 の助成を受けたものである。

## References (selected)

- Anderbois, S. (2016) A QUD-based Account of the Discourse Particle *Naman* in Tagalog. *Proceedings of AFLA* 23.
- Bade, N. (2014) Obligatory Implicatures and the Presupposition of *Too*. *Proceedings of SUB* 18, pp. 42–59.
- Bade, N. (2016) *Obligatory Presupposition Triggers in Discourse: Empirical Investigations of the Theories Maximize Presupposition and Obligatory Implicatures*, Diss. University of Tübingen.
- Beaver, D. and B. Clark (2008) *Sense and Sensitivity. How Focus Determines Meaning*. Wiley-Blackwell.
- Chierchia, G., D. Fox. and B. Spector (2012) The Grammatical View of Scalar Implicatures and the Relationship between Semantics and Pragmatics. *Handbook of Semantics*. Mouton de Gruyter.
- Davis, C. (2009) Decisions, Dynamics, and the Japanese Particle *yo*. *Journal of Semantics* 26, pp. 329–366.
- Davis, C. (2011) *Constraining Interpretation: Sentence Final Particles in Japanese*. Diss, UMass Amherst.
- Eckardt, R. (2014) Dear Ede! Semantics and Pragmatics of Vocatives. *Approaches to Meaning. Composition, Values and Interpretation*, pp. 223–249.
- Grice, H. P. (1975) Logic and Conversation. *Syntax and Semantics* 3: *Speech Acts*, pp. 41–58.
- Grosz, P. (2011) German Particles, Modality, and the Semantics of Imperatives. *Proceedings of NELS* 39, pp. 323–336.
- Grosz, P. (2014) German “Doch”: An Element that Triggers a Contrast Presupposition. *Proceedings of CLS* 46, pp. 163–178.
- Gutzmann, D. (2012) *Use-Conditional Meaning: Studies in Multidimensional Semantics*, Diss. University of Frankfurt.
- Heim, I. (1991) Artikel und Definitheit. *Semantics: An International Handbook of Contemporary Research*. De Gruyter.
- Heim, I. (1994) Interrogative Semantics and Karttunen’s Semantics for *Know*. *Proceedings of the Israeli Association for Theoretical Linguistics*.
- 井上 優 (1997) 「『もしもし、切符を落とされましたよ』終助詞『よ』を使うことの意味」『月刊言語』26(2), pp. 62–71.
- Krifka, M. (1999) Additive Particles under Stress. *Proceedings of SALT* 8, pp.111–128. CLC Publications.
- 宮崎 和人・安達 太郎・野田 春美・高梨 信乃 (2002) 『モダリティ』くろしお出版。
- McCready, E. (2009) Japanese Particles: Dynamics vs. Utility. *Japanese/Korean Linguistics* 16, pp. 466–480. CSLI Publications.
- Oshima, D. Y. (2014) On the Functional Differences between the Discourse Final Particles *Ne* and *Yone* in Japanese. *PACLIC* 28, pp. 442–451.
- Percus, O. (2006) Antipresuppositions. *Theoretical and Empirical Studies of Reference and Anaphora: Toward the establishment of generative grammar as empirical science*. Japan Society for the Promotion of Science.
- Potts, C. (2005) *The Logic of Conventional Implicatures*. Oxford Studies in Theoretical Linguistics. Oxford University Press.
- Roberts, C. (1996) Information Structure in Discourse: Towards an Integrated Formal Theory of Pragmatics. *OSU Working Papers in Linguistics: Papers in Semantics* 49, pp. 91–136.
- Romoli, J. (2011) The Presupposition of Soft Triggers are Not Presuppositions. *Proceedings of SALT* 21, pp. 236–256.
- Sauerland, U. (2007) Beyond Unpluggability. *Theoretical Linguistics* 33, pp. 231–236.
- Schlenker, P. (2007) Expressive Presupposition. *Theoretical Linguistics* 33, pp. 237–245.
- Stalnaker, R. (1974) Pragmatic Presuppositions. *Semantics and Philosophy*, pp. 197–213.
- Sæbø, K. J. (2004) Conversational Contrast and Conventional Parallel: Topic Implicatures and Additive Presuppositions. *Journal of Semantics* 21, pp. 199–217.
- Takubo, Y. and S. Kinsui. (1997) Discourse Management in terms of Mental Spaces. *Journal of Pragmatics* 28(6), pp. 741–758.